

秦敏之：宗教家と実業家の狭間で¹⁾

三 宅 正 隆

- 1 はじめに
 - 2 秦敏之の略歴
 - 3 反省会と仏教青年運動
 - 4 秦敏之のアメリカ滞在と商店経営
 - 5 実業家としての出発：シンガーミシン裁縫女学院の経営
 - 6 宗教観の変化と回心
 - 6.1 次男二郎の死
 - 6.2 宗教との葛藤：「無宗教」時代
 - 6.3 近角常観との再会：回心体験
 - 6.4 仏教青年運動と信仰問題
 - 7 おわりに
- [補記]
- 1 秦敏之による「夏期講習会日記」と「夏期講習会開設の沿革」記
 - 2 秦敏之による奥村五百子伝

1 はじめに

明治期、真宗大谷派本願寺は財政縮小に追い込まれ、徳永（清沢）満之を最後にしばらく東京への留学生採用を見合わせていたが、1889（明治22）年、京都府尋常中学校の校長に就任していた清沢満之の申議によって東京留学を再開することになった。清川圓誠、月見覚了に続いて、近角常観、秦千代丸等7人が東京へと向かった²⁾。近角や秦は第一高等学校から帝国大学へと進み、卒業後近角は欧米の政教事情視察に、また秦は農商務省の実業実習生としてアメリカへ渡った。学生時代二人は、この頃盛んになった仏教青年運動に参加し、学校など各所に設立された仏教青年会を連合する組織の結成や運営、機関紙発行などにかかわった。しかし、近角はその後精神的苦悶、回心を経験し、欧米に旅立つ。欧米から帰朝してからは表立っては

政治的な運動からは身を引き、東京本郷の求道学舎や求道会館を拠点に信仰運動に打ち込んだ。一方秦はアメリカに渡るや宗教活動から離れ、商店経営や会社の支配人として実業家の道を歩むことになる。帰国後二人はそれぞれ進んだ道も異なることから次第に疎遠になるが、後に秦は幼い次男を病気で失い、弔問に訪れた近角と再会し、彼の話聞くうちに彼もまた回心を経験する。そして若き日々とはまた違った心持ちで再び宗教と向き合うことになる。

秦は大学時代まで非常に熱心に仏教運動に関わったが、当時の青年仏教徒による宗教活動についての研究書でも彼についての言及は少なく、言及もほとんど近角に付随する形で名前が挙げられる程度である。しかし、実際には学生時代は秦は近角よりも熱心に宗教活動に関わっていた。本稿では秦と近角が仏教青年運動へ関わった経緯から、秦の実業家としての生活や回心経験、また彼の宗教観などについて検証する。まず第2節で秦の略歴を説明し、次に京都の反省会の設立と仲間との宗教活動、貢献について考察する。そして、第4節では秦の米国での小店経営について触れる。続く第5節では帰国後実業家として活躍した姿と、子供の死に直面して経験した回心、宗教観の変化について振り返る。最後に、秦の経験した回心の内容に触れ、同時に彼の学生時代の宗教活動を総括し、なぜ実業家になって宗教から離れたのか、その経緯などについて考察する。補記として、秦の関わった東京での青年仏教徒運動と秦が宗教機関紙に連載した奥村五百子伝について若干触れる。

2 秦敏之の略歴

「パリ、サン・レジスにて 秦早穂子」とあとがきにある『巴里と女の物語』というエッセイ集が出版されている³⁾。著者である秦早穂子は映画評論家、随筆家として活躍するが、二十歳代でジャン＝リュック・ゴダールのデビュー作『勝手にしやがれ』の日本公開を実現し、その後も多くのフランス映画の傑作を日本に紹介したことで知られる⁴⁾。この随筆集に彼女の祖父母の生い立ちに触れた一編がある。「東海道五十三次絵図」と題したエッセイで⁵⁾、広重の東海道五十三次から数点を特別に染め上げた絹糸360色を駆使して屏風に仕立てた作品についての話である。この作品はミシンによる刺繍であるが、これは早穂子の祖母が始めたシンガー裁縫学院で教えられていた技術で、それに関連して祖母がシンガー裁縫学院で院長を務めた経緯などが語られている。

シンガーミシン社は19世紀中頃にアメリカで設立された会社であるが、瞬く間に世界市場を席卷し、ついに1900(明治33)年、ちょうど近角や秦が洋行に出かけた年であるが、日本進出を果たしている。この前年に外国人居留地制度が廃止され、内地に洋装の外国人も増え始め、西洋化の象徴としてミシンの需要も次第に増え始めることになる。シンガーミシンの日本進出が日本社会に与えた影響などについて、多角的に分析した好著として Andrew Gordon に

よる *Fabricating Consumers: The Sewing Machine in Modern Japan* がある⁶⁾。彼はその中で、シンガー社の日本進出に際して販売指揮をとった秦敏之について、次のように紹介している。

Born in 1870, Hata graduated from Tokyo Imperial University in 1899 at the relatively mature age of 29. With many of his classmates, he entered the higher civil service, in his case the Ministry of Agriculture and Commerce. In 1902 the ministry sent him for a year of foreign study in the United States. His supervisor encouraged him to visit the Singer Company and learn of its operations. Hata came away not only enthused at “the potential of his company to contribute to commerce and friendship between the United States and Japan” but sufficiently impressed to leave the ministry on October 1903 for a managerial post in Singer’s Japanese operation. His enthusiasm was infectious; his wife, Rimuko, introduced above, joined him in the “family” business in 1906 as founding director of the Singer Sewing Academy.

一方、秦早穂子がエッセイで触れている祖父敏之の生い立ちはゴードンの説明と少し異なる。早穂子によると⁷⁾、

敏之は、寺の出である。長男だったから、そのままゆけば、50代目の僧侶となるはずだった。しかし、第一高等学校、帝大の仏教哲学と経済を出ると、還俗して、実業家になることを志した。敏之が、利舞子に出会ったのは、寺の集会であった。彼は利舞子を見染結婚すると、生まれたばかりの長男を託して、アメリカに渡った。彼は親友と苦学しながら、ニューヨークにいた。親友は高峰譲吉博士の弟子であって、タカジャスターゼの発明に、貢献した人であった。…明治34年、彼は、シンガーの極東支配人の権利を獲得すると、早速、日本にとってかえした。ミシンの輸入である。

「敏之は、寺の出である」とある。彼は大阪府泉南郡貝塚町半田（現貝塚市半田）にある真宗大谷派の道教寺の長男として生まれている⁸⁾。ゴードンにあるように、敏之は常観と同じ1870年生まれで、東京帝国大学を1899年に卒業している。この時期真宗大谷派本願寺は財政縮小の方針から、清沢満之以後一旦留学生の採用を打ち切っていたが、清沢が京都府尋常中学校の校長につき、彼の建議によって再び東京留学制度を再開することになった。その中に近角常観、秦千代丸の名前もある⁹⁾。この時期の本山からの留学生には吉田賢龍や藤岡勝二、旭野恵憲、常盤大定など、近角や秦と一緒に東京での青年仏教徒運動の中心となった学生も多く、

このことも、あとで触れる関西の青年仏教徒との連携がうまく運んだ一因とも考えられる¹⁰⁾。

秦は学年で言えば近角より一年下であった。敏之の帝大での専攻は早穂子の引用には「仏教哲学と経済」とあるが、当時の東京帝国大学一覧によれば¹¹⁾、敏之は1896（明治29）年に文科大学の「史学科」に入学している。卒業はゴードンにもあるように1899年で、そのまま続いて大学院に進んでいる。東京帝国大学一覧の明治32-33年版の大学院学生名簿には、「大学院文科学士 文学士 秦敏之（大阪）『近世商業ノ文化ニ及セル影響』」とある¹²⁾。所属は史学科ではあったが、興味は経営にもあったことがうかがえ、それで早穂子は「経済」専攻と思い込んでいたのかもしれない。翌年の大学院名簿には秦の名前はないので¹³⁾、この年に中途退学し、農商務省に入ったと考えられる。

秦敏之の渡米時期や日本のシンガー社への就任時期、利舞子のシンガー裁縫学院（the Singer Sewing Academy）の開院時期についてもゴードンと早穂子の記述に若干食い違いがみられるが、両者とも年代については誤っている箇所もある。ゴードンによれば1902年に農商務省から1年の予定でアメリカに派遣され、翌年の1903年に農商務省を辞職して日本でのシンガーミシンの社の総支配人となったと説明されている。しかし、秦が日本を出たのは実際には近角常観と同じ1900年で、当初から3年間の米国滞在予定であった。一方、秦早穂子によれば「明治34年、彼は、シンガーの極東支配人の権利を獲得すると、早速、日本にとってかえし」とあるが、秦が帰国したのは1903（明治36）年10月で、予定通りほぼ3年間アメリカにいたことになる。秦は農商務省では最初は商品陳列館の嘱託員であったが、1年で実業練習生となり、すぐにアメリカに派遣された。ちなみに、上で引用した秦早穂子の説明の中に、敏之はアメリカで高峰譲吉博士の弟子で、タカジヤスターゼの発明に貢献した親友と苦学した、とあるがこの親友とは高峰氏が1900年にニューヨークの研究所でアドレナリンの結晶化に成功した際、助手として貢献した上中啓三氏のことである¹⁴⁾。秦にしても上中氏にしても、当時アメリカでは日本人移民の増加で現地の人々との摩擦もあり、偏見や差別の中で経済的にも大変な日々を送っていたと想像される。アメリカ滞在中の事業や帰国後の仕事などについては、後の節で触れることにして、次に秦の学生時代に関わった宗教運動について見ることにする。

3 反省会と仏教青年運動

秦は真宗中学時代から『反省会雑誌』に記事を投稿している。当時は秦千代丸で、最初に寄稿した論説は「新年ノ所感ヲ述ヘテ諸兄姉ニ望ム所アリ」と題したもので、創刊早々の第2号に掲載され、当時秦はまだ17歳であった¹⁵⁾。『反省会雑誌』は真宗本願寺派が設立した普通 교校に、有志によって設立された「反省会有志会」の機関誌で、首巻が1887（明治20）年8月に出ている。「反省会」については近年盛んになってきている明治期の青年仏教徒に関する

議論でもしばしば言及されるが¹⁶⁾、秦との関係で、ここでも若干触れておくことにする。

反省会の誕生や『反省会雑誌』の創刊については、後に中央公論社社長を務めた嶋中雄作が『中央公論社 回顧五十年』と題した回顧録に次のように書いている¹⁷⁾。「反省」を当時一途に近代化を進めた社会一般の世相との指摘がおもしろい。少々長くなるが、時代背景や「反省会」設立の目的などを理解する上で貴重な証言なので、そのまま引いておく。

当時、京都に私学の二大勢力があつた。一は謂ふまでもなく基督教を奉じた新島襄氏の率ゆる同志社であり、他は西本願寺立の里見了念氏を主盟とした普通教校である。孰れも地方学究青年の憧れの的となつて幾百の若き学徒を擁していた。この普通教校は、時の法主大谷光尊師がつとに僧侶に普通教育の必要を痛感せられて創設されたものであつて、普通教育を兼ねた仏教学校はこの普通教校あるのみであつたから、従つて西本願寺立とはいひながら、各宗の有為な縑素は争つてその傘下に集まつたものである。この進歩的な空気の中に醗酵せられたのが、すなわち本誌の濫觴たる反省会である。即ち普通教校の学生有志を中心として、「禁酒進徳」を標語に結成された一種の仏教リバイヴルである。時恰も明治十九年四月六日であつた。越えて二十年八月、その機関誌として「反省会雑誌」の第一号が発刊された。これが所謂中央公論の前身であり、創刊第一号であつたのである。

由来、仏教は明治維新の廢仏毀釈運動に依つて徹底的に打ちのめされてゐたのであつたが、この前後から教界内に反省自覚の風漸く起り、更生復活の曙光が現はれ初めたのであつた。これは単に仏教に限られたことではない。維新後の極端な西洋偏重の夢から漸く醒めて、我邦在来のものの再検討、再評価、見直しが要求されたのであつて、此傾向は美術に於て最も早く現はれ、宗教文藝之に次ぎ、かの鹿鳴館騒ぎにまで延焼して、遂に政治問題とまでなつたのであつた。かくして『反省』とは、実に当時日本の社会的全面に向かつて加へられた要求であつた。たまへ普通教校の反省会の如きは、その遍照の月光を宿した清純な露の一滴に他ならなかつたのである

この回顧録で嶋中雄作は『反省会雑誌』への古河勇の貢献についても明かしている¹⁸⁾。しかし一方で、飯塚勝重の「新仏教徒能海寛と一統教」と題する論文には能海寛の貢献についての言及があり、「能海は、この雑誌（反省会雑誌）の編集に積極的にかかわり、また、記事も多く書いている」と彼が反省会の会員として雑誌の発行などに大に関わっていたことを指摘している¹⁹⁾。ここで、能海を取り上げたのは、反省会雑誌との関わりだけでなく、当時から秦は能海とかなり親しくし、活動をともにしていたからである。能海は普通教校から明治22年に文学寮（普通教校の後身）に移つたが、年末には退学して東京へ出た。秦の東京留学に遅れること約半年である。能海はまめに日記をつけていたが、そこにしばしば秦の名前が登場す

る²⁰⁾。能海は京都の反省会時代から英文雑誌の発行にも関わり、世界的な規模での「新仏教運動」を展開しようとしていた。京都普通教校で立ち上げた「英文会」*English Composing Society* (E.C.S.)では英文の週刊機関誌 *NEW BUDDHIST* を始めている。東京に来てからも英文雑誌の刊行に意欲を見せ、慶応義塾に入学後には学友に声をかけ、ここでも「英文会」(E.C.S.)を組織し、月刊の英文集 *WISDOM & MERCY* (『智恵と慈悲』)を創刊している。これに関して、能海の当時の日記に「秦君に英文会のことを話すも賛意を得られず落胆」とあり、2人の見解の違いがみえて面白い。他にも、例えば、19世紀末にニューヨークで結成された神智学協会から明治22年に創始者で初代会長を務めたオルコット (Henry Steel Olcott) とスリランカの仏教復興運動の指導者の一人アナガーリカ・ダルマパーラ (Anagarika Dharmapala) 等が来日している。この招聘計画については反省会メンバーなども関わったとされる²¹⁾。来日した際、ダルマパーラが京都の病院へ入院したらしく、能海の日記に「反省会メンバー能海、秦が看病する」とある。このように、能海の日記には「秦来遊」などの記述が散見され、二人の付き合いは能海が明治31年にチベット探検に出発するまで続いていた²²⁾。残念なことに、能海は1901(明治34)年、チベット探検中に消息をたつた。

実はこの時期、『反省会雑誌』は『反省雑誌』と改題され、発行所も反省会から反省雑誌社と改まり、本社も東京へと移っている。この「東転」について、古河勇は次のように書いている²³⁾。東西の仏教活動の風景が見える。

東京の仏教活動が遅緩なのは、人物と金が乏しいからで、学校はあつてもその整備が遥かに京都に及ばず、仏教雑誌は十一もあるが、その議論の主旨、編集の体裁、共に京都に於ける一反省会雑誌に及ぶもの甚だ稀なりにしにあらざや。今や青年団隊として大いに観るべきもの二あり、一は京都の反省会、一は東京の日本仏教青年会。

当時いくつかの官私立諸学校を中心に「青年仏教徒」の名を冠した組織が結成されていた。関西佛教青年会は当時ロンドンに留学中の藤井宣正が佛教青年統合の必要性を論じたことから始まり、次第に組織化の機運も高まり、反省会の藺田宗恵、桜井義肇などが中心となって高倉大学寮、本願寺大学林、第三高等中学、京都医学、京都尋常中学の諸校有志に働きかけ、結成にこぎつけた。藺田香融は「初期の仏教青年会」の中で²⁴⁾「本会の首脳部は真宗東西両派の新進学徒によって占められていたようであるが、これは、本会の発端が、本派文学寮に芽生えた反省会にあったことと思ひ合せて興味ぶかい」との感想を述べているが、歴史ある仏教本山を多く有する京都の若者が一体となり、東京とは一味ちがった宗教活動を繰り広げたことがうかがえる。

東都では1892(明治25)年に青年仏教徒組織の統一をはかる連盟体「仏教青年連合会」が

組織され、2年後規模を拡張し「大日本仏教青年会」が創立された²⁵⁾。そして会の主たる活動として佛教夏期講習会や釈尊降誕会の開催が決定された。佛教夏期講習会開催に関して藺田香融は前掲論文で「本会の濫觴が明治二十四年にさかのぼり、東京では東大・一高における徳風会、京都では文学寮の反省会が新風をまき起す母胎を成したことが知られる」と記し、青年仏教会の看板的な年中行事となる佛教夏期講習会の開催が「不思議にも東西両都に於ける青年意見の暗合にあり」と東西の同志の糾合であった点を指摘している²⁶⁾。何れにせよ、これによってやっと東京の「遅緩な仏教活動」も始動し始めることになる。

この東都の青年仏教徒が結集して佛教夏期講習会の開催の決定にこぎつけた経過については比較的よく知られている。藺田には次のようにある²⁷⁾。

東都にありては、24年11月27日、真宗の祖親鸞聖人往生の前日なるを以て、寺田福寿師が当時帝国大学・第一高等中学生間に成れる徳風会員に牒して、来参聞法を促されたりしに、十余名の同会員等其の招きに応じ、之を機として席上夏期学校開設の議を決し、翌年一月六日、帝国大学・第一高等中学・専門学校・慶應義塾・哲学館等の仏教青年数十名相会し、遂に毎年夏期講習会と釈尊降誕会との開設を決し、各校委員を設け、特に徳風会員をして講習会の事に当たらしめたり。爾来同会員等熱中事に従日、之を西都なる第三中学並に両本願寺学校に諮り来る。

この「東西両都提議正に相投合し」た詳しい経過については、秦が『反省雑誌』に「夏期講習会日記」「夏期講習会開設の沿革」として報告記事を投稿して当時の事情がよくわかる²⁸⁾。この手記は、当時実際に計画に携わった関係者の証言として貴重である²⁹⁾。

東京での仏教青年会の結成や、その契機となった夏期講習会計画の始まりは、上に引用したように一般には明治24年11月の寺田福寿師の呼びかけに応じて、開催された翌年の東都仏教青年大会ということになっているが³⁰⁾、実はすでに懇談会の4ヶ月前に秦による全国の仏教徒青年に対する「団結の訴え」が出され、夏期講習会開催の提案がなされている。この訴えは、1891（明治24）年の『反省会雑誌』に掲載された秦による「青年仏教徒の連合及び真理の討究は夏期なり」と題した論説で、「事を為さんとするもの、必ず団結の必要あり、政治家に団結の必要あらば宗教家にも亦団結の必要あり」「我国仏教徒の青年其数少きに非ず全国いたるところに仏教学校の組織もあり、官私の諸学校に入り、卓越の材を抱え…此大多数の仏教学生が互いに其名声を聞き、其才徳を慕ふも、未だ直接に相面して談論横議」する機会はない「青年仏教徒が相往來する方法を講ずるも亦無益に非ざるべし」³¹⁾と、特に、東西青年仏教徒の団結の必要性を熱く訴えている。したがって、このアピールが契機となり、福田師の呼びかけが実現し、翌年から仏教青年会の夏期講習会の計画が進むことになったと考えられる³²⁾。

この訴えの主たる動機としては、「宗内の腐敗の塞気を洗浄し、社会の改良に着手せしものは青年にして满腔の熱血、宗門の悪慣習を打破するの勇あるものも亦青年なればなり」など青年仏教運動の趣旨ともなる目的が挙げられているが³³⁾、仏教徒青年の団結の必要性を緊急課題として訴えた裏には、やはりキリスト教への対抗意識が大きかったと言える。龍溪章雄は先にあげた論文でも、この時期各学校に仏教青年会が設立されたのはキリスト教青年会の成立に刺激・触発されたとも考えられる、と推測しているが、秦の「基督教の諸教会一致すれば仏教の諸宗も亦団結する」、「而して今や基督教の青年大に其連合を謀る 吾徒青年亦豈連合せざるを得んや」など³⁴⁾、この頃東京で結成されたキリスト教青年会の活動を随所に引き合いに出していることを考えると、仏教徒青年の団結を訴えた背景にはキリスト教への対抗意識がいかにか強かったのかがわかる。夏期講習会実施についても、「仏教者中已に此説を持するの人も多々なるべし され共是未だ仏教者の実行せざる所にして、基督教者の已に着鞭せし所なり 聞説く基督教者今年の夏期学校は 箱根山上(寺院なりとか)に開かると 而して吾仏教徒青年輩は、何れの処にか這般の会場を得ん」と、キリスト教主催の夏期学校に対抗しての提案であることがわかる。この点についても、龍溪は、第一回のキリスト教青年会の夏期学校が明治22年に開催され、「仏教青年の夏期講習会は、あるいはこれに触発されて提案・計画・実行されるに至ったのかもしれない」と推測しているが³⁵⁾、秦の発言でその正当性が裏付けられる。秦は論説の最後を、「能ふべくんば今年之を為さん、能はずんば明年を期して夏期学校の設立を為さんこと、是れ余の学者先生に切望する所なり」と結んでいる。実際には夏期講習はこの翌年、明治25年に実施された。

日本仏教青年会による夏期講習会や釈尊の降誕会も7回を迎えた1898年にはいわゆる巢鴨監獄問題で仏教側が激しい反対運動を繰り広げ、また仏教の公認教を求める運動も始まるが、ちょうどこの時期近角常観等は大学卒業時期にあたった。そして、近角や秦は大日本仏教青年会の幹事に就任しその運営に関わりながら、さらに大日本仏教徒同盟会を組織し、機関紙の発行などを通して、全国的な政治的宗教活動を繰り広げた。従来あまり注目されてこなかったが、これまで見たように、卒業までは近角よりもむしろ秦の方が反省会や仏教青年会の委員として、積極的に宗教革新運動に関わっていたことがある。しかし、卒業の時期からは近角の存在感が急激に大きくなり、次第に秦は近角に寄り添った形で活動するようになる。秦のそのあたりの心境については、後で触れることにする。

近角や秦は学生として仏教活動にも情熱を注いだが、特に近角はこの頃清沢満之らが推進した、いわゆる「白川党宗門改革運動」に参加し、宗門である大谷派内の財政や教学に関わる教団改革運動に奔走する。しかしその後常観は、運動を共にする友人などとの人間関係に悩み、深刻な煩悶状態に陥るが、阿弥陀仏の救いに目覚め「我が真の朋友は仏陀である」との絶対他者である阿弥陀仏の慈悲に触れ、「回心」を経験する³⁶⁾。そして、近角は自身の入信経験をま

じえながら仏教の伝道、実践活動を続けていくが、他方で、秦はだんだん宗教活動から身を引くことになる。

4 秦敏之のアメリカ滞在と商店経営

宗教の自由が認められ、キリスト教の布教などが活発になると、政府はキリスト教を仏教と差別なく、一括して国家の統制下に置こうとする宗教法案を貴族院に提出した。これに対して仏教界は猛烈な反対運動を繰り広げ、近角も大日本仏教徒同盟会の機関紙などを通して反対運動を続けた³⁷⁾。結果的にこの宗教法案は1900(明治33)年2月に貴族院で否決された。そして、その数ヶ月後近角と秦は海外視察のため日本を離れることになる。

秦は近角より少し遅い8月の出発で、農商務省から実業練習生としての派遣であった。当時幹事を務めていた大日本仏教同盟会の機関紙『政教時報』に「秦氏の渡米」として報告があるが、渡米目的については公務の他に「文学を研究する」ためと記されていて、少し意外である³⁸⁾。

本会総務員文学士秦敏之氏は愈々本月1日を以て横浜港出帆の便船に搭し渡米三カ年間留学実業の視察をなし兼て文学を研究する由、吾人は本会の創立より今日に至る迄非常に尽力されたる労を万謝すると共に切に同氏の健康を祈り無事帰朝せられんことを望む

実際には出発予定が10日ほど遅れて横浜港を出発することになるが、次号の『政教時報』に「秦氏の送別会」としての報告がある³⁹⁾。11月には「秦文学士は無事米国ニューヨークに到着せられ、同市に滞在せらる」と無事到着した知らせも掲載されている⁴⁰⁾。

アメリカ到着後『政教時報』に3度「アメリカ便り」が掲載されている。最初の記事は「米國通信の一節」として、仏教青年会諸氏宛てに出された手紙の抄記である⁴¹⁾。「当國に於ける宗教思想は一様ならず 従て御承知の如く基督教のみが彼等を満足せしむべき唯一の宗教にては無之候、...日本青年仏教徒に忠告仕候、事業を唯帝国内に止めず広く世界の舞台に登らんことを.....当地に於ける政治熱は今や最高度に達し候...当地の物質的進歩は到底筆紙の及ぶ処にては無之候...」など、アメリカ滞在中も短いながら、現地の状況や、日常生活から受けた印象について、宗教やビジネスにとどまらず、政治や社会一般について書き送っている。特に「当地に於ける政治熱」については日本との落差が大きく、印象深かったようである。たまたまこの年(1900年)はアメリカ大統領選挙の年で、民主党ブライアン(William Jennings Bryan)と共和党マッキンリー(William McKinley)との一騎打ちであった⁴²⁾。秦は「当地に於ける政治熱は今や最高度に達し候。レパブリカン及デモクラットの政黨員は毎夜

市街又は広場の隅にて演説仕候」と選挙戦を興味深く観察している。ブライアンは当時非常に人気の雄弁家、精力的な遊説家として知られていたが、秦もブライアンが「昨日一日中に演説をなすこと二十八回、旅行道程二百五十哩、挨拶をなせし人の数は凡て二十一人に上り候」と驚嘆しつつ、「昨年宗教法案に於ける近角真岡両君の運動を思ひ起し候」と近角らと宗教法案反対運動に打ち込んだ日々に関心を寄せている。選挙の争点でもあった「帝国主義トラスト貨幣の自由鑄造」などについても触れ、渡米まもない時期ながら、的確な観察力が光る。

二度目の報告は翌年「紐育通信」と題してやはり『政教時報』の「雑録」に掲載されている⁴³⁾。いくつかの項目ごとに、アメリカ人の国民性や文化、社会について報告している。項目を上げれば「宗教信者」「日曜日」「宗教の基礎」「青年会」「音楽」「接待」「飲酒」「群集」などである⁴⁴⁾。『政教時報』による三つ目の報告記は「米国より」と題され、1901（明治34）年11月号に掲載されたものである⁴⁵⁾。「小店」開業についての報告となっている。

真岡兄外青年会員諸君・清沢先生外浩々洞諸兄

諸兄に対し平素の御無沙汰申訳無之候へ共俗務に執掌致候結果自然此に至り候事と御宥願上候。扱今回小生義決心し上当市に於て一小店所有之事に相定め本月一日を以て開業仕候間今後宜敷願上候。回顧すれば昨年八月故国を發せし以来恰も一年、今尚一の為し遂げたる事業としては無之候へ共兎に角一貧洗ふが如き小生にして小店開設に至るまで江湖之信用を得たるは多年佛教の道徳によりて小生を導き給ひし諸兄の御庇蔭による事と深く奉感謝候前途の事予め明知難致候へ共多分従来の如くにして直進すれば、大なり小なり成功は可致と存候...

この「小店」とは日本雑貨店で、ニューヨークに着いて半年あまりのことである。翌年2月に近角常観宛てに出された手紙の差出人住所に「T. HATA & CO., Importers of JAPANESE GOODS, 12 East 16th Street, New York City, U.S.A」とある。この頃の生活について、ドイツから帰国まもない近角に送った書簡に、次のように書いている⁴⁶⁾。

君ハ今後ドノ様ニヤルツモリカ、御暇ニハ聞カセテ貰ヒタイ、小生ハ目下小僧デ日々ギュー
〜働イテ居ル、丸デ昔シノ空想高言ガ夢ノ様デ恥カシイコトデアル、併シ心配身体丈ハ
無事デアルカラ心配セズニ居テ呉レ給へ

雑貨店を開店すると、さらに卸店の経営を企てるが、結局失敗する。ところが、幸いにも時の総領事内田定槌氏の紹介で翻訳者としてアメリカのシンガー裁縫機械会社に入社するチャンスを得る⁴⁷⁾。秦早穂子はミシンとの出会いを前掲エッセイの中で、次のように書いているが⁴⁸⁾、

実際には内田氏の助力が大きかったと言える。

敏之は、ある時、おとずれた、シンガーミシンの本社で、アメリカ人のひとりから、着ていた紋付の袖をいきなり引き裂かれてしまう。「いつまでも、手で縫っているから、日本はおくれをとっているんだ」彼は、日本男子として、深い屈辱を味わった。しかし、その瞬間、これだと思った。「これからの日本の男も女も、ことに女たちはだんだんに、洋服を着ていかざるを得ないだろう。日本の近代化を観念的にとらえるより、まず、具体的に動き出さねばならない」

この後、「刻苦精励半年ならずして」同社日本部の事務一切を任されるようになり、1903年になると新たに日本支店の総支配人に就任した「トービン」に秘書に抜擢され⁴⁹⁾、9月には農商務省の練習生を辞して帰国する。帰国後は、シンガーミシン社の東京支店副支配人、横浜中央店の支配人として事業拡大に貢献するとともに、ミシン裁縫教育にも打ち込み、ミシン普及に貢献した⁵⁰⁾。

この間、アメリカの秦から近角に宛てて数通の書簡が出されている。求道会館に残る秦からの書簡をまとめると、次のようになる⁵¹⁾。

書簡番号	日付・年代	送信者	受信者	整理番号
1	1902(明治35)年1月	秦敏之	近角常観	3302
2	1902(明治35)年2月	秦敏之	近角常観	3246
3	1902(明治35)年9月	秦敏之	近角常観	3379
4	1903(明治36)年10月	秦敏之	近角常観	3592
5	1903(明治36)年12月	秦敏之	近角常観	2540
6	1909(明治42)年1月	敏之／利舞子	近角常観	1506
7	1910(明治43)年9月	敏之／利舞子	近角常観	10659
8	1913(大正2)年1月	秦敏之	近角常観	2687
9	1914(大正3)年1月	秦敏之	近角常観	8530
10	1914(大正3)年1月	秦敏之	近角常観	8586

最初に出された書簡はニューヨークからの手紙で、近角がドイツから帰国する数ヶ月前に書かれたものである。先に触れた「米国通信の一節」で「日本に於ける俊才は亜米利加に於ても俊才たることを得、... 事業を唯帝国内に止めず広く世界の舞台に登らんことを」と日本の青年仏教徒に檄を飛ばしているが⁵²⁾、自身による実践としてであろうか、自らニューヨークでT.

HATA & CO., *Importers of JAPANESE GOODS* を開店した頃の手紙である。

1902年2月には2通常観宛てに手紙が届いている。一通目は常観が滞在していたドイツ宛てに出されたものであるが、2通目の手紙は浅草本願寺宛てになっている。常観の帰国も急であったが、浅草本願寺宛てになっているので、投函時にすでに常観の帰国予定を知っていたと考えられる。書簡にも「定めて宗教問題談合ニ指出セラル、傾見ヨリ突然帰朝命令ニ接セラレタル御事と存候 今頃ハ又々火ノ如クナリテ働ラキ居ラル、事ナラント目ニ見ルガ如キ心地致候」とあり、常観をよく知る朋友ならではのコメントである。欧米での滞在予定は当初3年であったが、実際には2年後に突然の帰朝命令をうけ、1902(明治35)年3月に帰国した⁵³⁾。

アメリカからのこれらの書簡はいずれも店の経営についての相談が主たる内容となっているが、その他にもアメリカでの「近況」についても触れられていて、常観が新年に友人たちに送った写真についての言及もある⁵⁴⁾。農商務省からは実業練習生としての派遣で、すぐに輸入雑貨店を開くも経済的には困窮していたようで、当時の状況を後に次のように振り返っている。「在学中は学資と妹の結婚費のために借金を習費、学校卒業以後にも借金をして家計の不足を補った。借金のある事は平気で人にも話また甚だ恥づべきこと、も思はなかつたのである」⁵⁵⁾。

しかし、帰国後シンガー社に奉じてから次第に経済状態も良くなり、「昔学生時代に拵へた借金も今日ではなくなった。又現在の生活は決して贅沢ではないが自分の身分だけに相当して必要なものだけは買い取ることができる。…この7、8年間は精神上に於ての苦悶を除き、又財政上に於ての困苦をも知らず、唯日々職務に熱中して日曜毎に家庭の娯楽を貪るといふ状況であつた」と次第に安定した家庭人となる⁵⁶⁾。このように泰は日本に帰ってからは実業家として成功し、忙しい毎日を送るが、以前のように宗教と関わることもなく、常観らとの付き合いも次第になくなっていった。

5 実業家としての出発：シンガーミシン裁縫女学院の経営

泰は利舞子と結婚すると、まもなく生まれた子供と利舞子を残してアメリカへ発った。敏之の妻利舞子は1879(明治12)年浅草で米問屋の娘として生まれている。1897(明治30)年に女子高等師範学校(現お茶の水女子大学)に入り、高等師範を出ると盛岡や第一高等女学校の教師になった。敏之とは寺の集会で知り合い、間もなく結婚した。父親が非常に熱心なる真宗の信者で、よく娘を連れて説教の聴聞に通っていて、二人はこのような縁で知り合ったのかもしれない。敏之は帰国すると、横浜に住み、利舞子との間に男3人、女2人の子供をもうけた⁵⁷⁾。

シンガー社はミシン販売に際して、使用者開拓のため洋裁技術の普及をも視野に入れた販売戦術を展開した。利舞子は泰之のミシン販売事業を洋裁教育という面でサポートすることにし

た。利舞子は女性が家庭にいながらも経済的に少しでも自立の道が開けたらと、敏之とともにシンガーミシン本社に裁縫教育機関の設立を訴えた。結局シンガーミシン社もミシンの販売促進を見込んで、シンガー裁縫女学院の設立を認めた。1904年7月の朝日新聞に「ミシン裁縫女学院」という見出しで「今度神田区表神保町一番地に設立となりしシンガーミシン裁縫女学院はシンガーミシン機械を以てシャツ、股引、単衣其他各種衣服の裁縫方を教授するものにて院長は秦利舞子なり」とある⁵⁸⁾。このように敏之は妻利舞子と一緒に忙しい日々を送ったが⁵⁹⁾、結局はこの裁縫女学院も1910（明治43）年12月に閉院に追い込まれた。閉院を迎える3ヶ月前にシンガーミシン裁縫女学院閉院予告が「先輩、友人、諸新聞雑誌社、業生、同窓会員各位御中」としてシンガーミシン裁縫女学院設立者 秦敏之、同院長秦利舞子名で雑誌、新聞紙上に掲載された。この「通知書」は求道会館書簡資料の中にも残されていて、資料として貴重であろう⁶⁰⁾。シンガーミシン裁縫女学院は閉院後もシンガーミシン裁縫刺繍院として継続して運営されたが秦夫婦は1912（大正元）年早々に次男二郎を亡くし、結局その2年後、敏之も病に倒れ、翌年療養のため一時大阪へ移っている。求道会館には、大正3年元日に出された秦からの転地静養通知も残されている⁶¹⁾。

6 宗教観の変化と回心

6.1 次男二郎の死

先に見たように秦は学生時代に宗教活動に身を投じていたが、シンガーミシン社に勤め、実業家になると一変して宗教に対しては一定の距離を置いて生活するようになる。ところが、子供の死をきっかけに、回心を経験し、人生における宗教の大切さを再認識する。秦は、その回心に至る経緯や、同じように宗教を避けたり、宗教が不要のものであると思い込んでいる人々に向かって信心の大切さを訴える手記を著している。近角がベルリンから帰朝し、求道学舎を基点として本格的に信仰運動を繰り広げはじめた1904年に創刊された『求道』の第10巻2号に掲載された「二郎は死して活躍せり」と題した告白手記がそれである⁶²⁾。この手記は彼にしては長文で、「二郎の死」、「二郎に対する追懐」、「心機一転」、「無常を感ずるは厭世に非ず」と題された各節からなる。最初の3節は、我が子が死に至った経緯に加えて⁶³⁾、当時の秦の日常や仕事や家族との生活を中心に⁶⁴⁾、二郎と過ごした忘れがたき日々を回想したものである。日々職務に奮闘して多忙な毎日を送りながらも「日曜毎に家庭の娯楽を貪るといふ」「家庭の朗楽に重きを置いた」生活で、「自分は余程子煩悩の方で」できる限り子供と一緒に過ごした、とある。しかし、二郎を亡くすると、「子供と共に遊んだことの機会が多い丈」「今は涙の種も多い思ひ出もどうしてもとまらない。妻の目は腫れ自分の心臓が焦がされるやうになるのも無理はないのである」と、楽しい家庭が再び戻らないことを嘆き、悲嘆に暮れた様子が綴

られる。

秦の子供の訃報を聞き、近角常観も弔問に訪れ、仏前で読経をし、その後で家族や弔問客の前に法話をしている。秦もじっくりと近角の講話に耳を傾けるうちに、やがて学生時代に宗教活動に打ち込みながらも抱いていた宗教に対する疑問が氷解し、また子供の死を前に、悲嘆に暮れていた家族も「涙が乾いて何となく愉快の光に照らされ」るように、変化が起こったことを綴っている。そして、葬式の席上では来会者に対して「御同情は有りがたいが、皆さんが想像してくださる程、吾等は悲みの情に沈淪して居ないといふ挨拶迄をもした程である」と近角の話によって、回心を経験したことを語っている。最後にこの回心によって得られた慈光に照らされた生活を多くの人にも経験してほしいと、それまでの自らの宗教に対して抱いていた誤解や忌避の態度を告白しながら、小論を著すに至った動機を次のように述べている⁶⁵⁾。

此小冊子は自己の知己友人其他二郎の葬儀に列席されたる人々及先輩の間に頒布する積りである。... 此小冊子が各人の信仰心の刺激となれば此上なき友人への挨拶と思ふからである。... 若し又仏教及び基督教の信者にして其真意を得られぬ人、若くは未だ宗教を信ぜず宗教を軽蔑して居らるゝ人が読まれたならば兎に角人世の真相に就て一考して貰ひたいといふ希望を持つのである。

この回心経験の告白は、同時に実業界に入って学生時代に打ち込んでいた宗教研究や活動から身を引いた経緯についての回想と反省を述べたものになっている。

6.2 宗教との葛藤：「無宗教」時代

秦は実業家になると宗教から疎遠になったが、実は学生時代宗教活動に打ち込みながらも、宗教に対しては絶えず葛藤していた様子が、次の回想からうかがえる⁶⁶⁾。

自分も学校に居る時は一時宗教の事は熱心に研究して見た、仏教の各高僧の説法も聴いた又友人及信仰を説く人々等に就いて種々の質問をもしたが今一つといふ所で真の安心立命といふものが到底出来なかつた。哲学的には佛の存在といふことも立証し得るかの如く思つたこともある、併し其仏には甚だ暖みがなかつた。又本郷の基督教の中央会堂へも時々参詣をした、コートといふ西洋人の自宅迄をも訪問して信仰といふ事に付て心から尋ねた事もあつたが、矢張人生に是非宗教が必要であるとは思はなかつた。

結局、「若し宗教信者となれば自分は屹度偽善家になるに違ひないと思つて、寧ろ宗教の事は已後断然口にせまい、信仰問題とかいふやうなことはには寧ろ自分は近寄らないやうにしよう

と思つた」と意図的に宗教に関わることを避ける決意をする。上の引用にある理由に加え、秦は次のような理由を挙げ、この決心に至ったと述べている⁶⁷⁾。

1) 宗教は窮屈で心苦しい

学生の時一時非常に熱心に宗教を研究した。哲学的に佛や耶蘇教のゴッドなるものの存在を立証し得るのかなどと考えると実に心は苦しかった。宗教を求めるほど世の中が窮屈になつて、却て心苦しい。こういうことを考える必要がないと心の煩悶が減った。

2) 宗教は厭世的で活気や慰安を与えない

宗教、特に真宗は無常を説く事甚だしきが故に、男女青年の間には活気を与える事が少ないものである。宗教に依って人が慰安を得るとか、活動するとかいうことは信じられない。なぜなら活動は宗教がなくても出来るから。ゆえに宗教なるものは人生の装飾。

3) 道徳があれば十分

道徳さえ欠けていなければ宗教は必要ないと思うようになり、自分には宗教の信仰はないが、道徳丈は堅固にやつて見たいと決心した。道徳の事は人間としてすべき道を尽すという事のみであるから、頗る事柄が簡単である。善行をすれば直ちに功績が現れるので、非常に愉快である。家庭もすこぶる円満である。

4) 宗教信者となれば偽善者になる。宗教家は迷信家である。

このような宗教に対する思いは、宗教に批判的な人や宗教に興味があるが、特定の宗教の信者にはなりたくないと思っている人が共通に抱く宗教に対する思いであろう。阿満利磨はこのような「無宗教」を標榜する人々の宗教観や歴史的背景を考察した『日本人はなぜ無宗教なのか』と題する書を著している⁶⁸⁾。阿満は日本人が「無宗教」と称する場合、かなり複雑な意味合いが含まれると、近代日本の歴史を追いながら、その経緯を詳細に分析している⁶⁹⁾。その中で無宗教化を特に日本文化の「平凡主義」「日常主義」と関連させて論じている。つまり、無宗教化とは宗教が日常の俗生活の中に没入し、宗教と意識されなくなる過程であると説明する⁷⁰⁾。したがって、「宗教」と自覚されるものは通常何々教と名のつく、特別の教義や教祖、教団を持つ制度宗教のことである。日常生活で先祖崇拝やいわゆる年中行事として「無宗教化」した宗教に対して、なぜ宗派「宗教」は避けられることが多いのか。それは、現在に至っても日本社会に残る人並み、世間並みを重視し、共同体の平穏さを破壊する極端な行動を恐れ、極力避けると言う「平凡至上主義」のせいでもあろうと阿満は言う。日常の平穏が最重要で、宗教として日常の生活から逸脱しない程度におさめようとするからである。これは、現在で言えば単に日本固有の問題ではなく、アメリカなど先進国にも見られる現象である。意識的に「宗教」に入るには日々の生活を見つめ直し、人生の矛盾や不合理を自覚し、それを問題として、日常

的な解決手段ではなく、もっと根本的な方法を求めることが要求される。つまり、仏教で言えば、人生に対する懐疑や否定が前提となる。したがって、平凡な日常生活を送りたいと思う者には特に超越性を持つ神仏は必要なく、逆に、一般の人々にとっては危険な存在で近づきがたい対象となる。その結果、葬式や先祖崇拜など、日常生活に密着した、あまり特別ではない宗教には寛容で、日常の問題には宗教ではなく、あくまで常識的な世俗の解決法で対処し、特に、解脱を求めたり、一步踏み込んだ絶対的解決を望むことはない。この段階にとどまる限り、宗教は哲学など思考対象として問題とはなるが人生問題の解決にはならず、逆にいたずらに煩悶の因となり、あるいは「窮屈で心苦しい」だけのものである。回心後に秦が感じたように「人生の光」とはならないのである。

6.3 近角常観との再会：回心体験

前節にあげた秦の告白からも、この日常主義に対する執着が見て取れる。したがって、仏教的に言えば入信のきっかけが必要で、「ご縁」があってはじめて信仰を考えることができる。秦は二郎の死を機縁として常観の話を書くことで、回心を経験することになる。秦はこの機縁を次のように述べている⁷¹⁾。

昨日迄は家庭の円満に目が眩み、衣食に窮せざるが為、安心を為して此人生に大満足をして居つた我が家庭も、今日は遠慮なく無常の大敵に侵入せられた。目を開けば人生は決して常住なるものではなかつた。然るに二郎の一死は此人生無常の状態を親しく自己に感ぜしめた。之れを以て思へば我家の二郎は死して倍々活動して居るのである。...無常を知りて而も活動の出来るのは何の為であるか、偉大なる他力の佛光に照されたからである。

「無常は人生の事実である、如何程樂觀しても無常は無常である、吾等は実一寸先が見えないといふのが真である」と「無常」に目覚めたことが、回心につながったと言う。常観も常々話すことであるが、無常は人生の事実であるが、それ自体は宗教でもなく、ただ自然の摂理である。仏教では一般に「無常」というと消滅に至る変化について語る事が多く、したがって無常は苦であると説く。この「無常観」「罪業観」が仏教は「厭世的」「悲観的」であるとの印象を一般に与える。秦の告白にもある「真宗は無常を説く事甚だしきが故に、男女青年の間には活気を与える事が少いものである。宗教に依って人が慰安を得るとか、活動するとかいうことは信じられない」という思いがこれである。ところが、回心によって「無常に驚いて他力の佛徳によれば大活躍は自然にともなふのである」というように思いは変化する。煩悶によって、悩みも深い問題として経験され、最後に「根底まで達するとき、そこの最後の光に触れて初めて人生根本の大なる意義を見出すに」至り、これが信仰なのである。二郎の死で回心を経験す

るまでは、秦は真宗は人心を弱からしめ厭世の心を強からしむると考えていたわけであるが、回心経験で人生の無常を認め、正面から向かい合い、弥陀の慈悲に触れることで、信仰によって再び人生に立ち向かう力を得ることができた。そして、宗教によって慰安が得られることを知り、かつてのように「宗教は人生の装飾である」といった思いを反省するわけである。

秦や家族は常観の話聞いて、「之より三人の涙が乾いて何んとなし愉快の光に照らされた」とある⁷²⁾。この時の常観の説法について秦は、「近角氏の話は別に珍しい話ではないのである。同氏が其時話された事柄は曾て自分が大学に居つた時に諸方の高僧を訪問して聴いた説教と大差は無いのである」と付している。浄土教ではしばしば「機縁」として聴聞の大切が強調され、「すでに救われていることを」聴聞者が気づかせてもらうことが信心獲得に他ならないと教えられるが、まさにこのことであろう。秦は「無常」を実感できた時のことを、次のように書いている⁷³⁾。

近角氏が真宗の和讃を引いて「弥陀観音大勢至、大願の船（ママ）に乗じてぞ、生死の海（ママ）にうかみつゝ、有情をよばふて乗（ママ）せたまふ」⁷⁴⁾といふことを説明せられ、此世は決して安楽のものには非ず吾等の住む処は苦界であるといふことを説明せられた時、初めて自分は不完全なる処に住んで居るといふことに気が付いたのである。

常観の弔問時の話について、もう一つ語られている。これは、秦が一時宗教から遠ざかった一つの理由でもあったが、仏や神の存在などを考えると、心苦しくなったと言う問いに対する答えにもなっている。阿含経に有名な毒矢のたとえ話があるが、これを借りて語っている。話は、例えば、谷底に落ちて絶体絶命におちいったとする。その時上の方から一本の縄が降りてくる。その時、この縄を降ろしてくれた人が誰であるか、縄を下す人が有るか無いかなど詮索する暇はほとんど無いであろう。ただその綱を見たらそれに縋ろう、捕まろうとするのが人情であろう。自分からはとても助からない場所に這入って唯一の綱しか自分が助かる道はないと知ったからである、という話である。弥陀の本願を信頼するというのは、これと同じである。救済の縄が目前にきたら、救済の縄を垂れてくださる佛の有無や弥陀の力量などを問う暇はない。これらを研究しようとするものは、未だ自己が限りなき苦海に沈淪していることを自覚しないからである。秦は、この世は苦海で、これに気がつけば直ちに救済の佛の光の有り難さがわかる。今日に於いて顧みれば、自分は実に浅はかな考えを持っていた。自分の浅き知恵を以て宗教の不可思議なることを推測し、これを判断し得たかの如く思っていたのは実にはずかしい話である、と告白している。

6.4 仏教青年運動と信仰問題

秦が早くから参加した「反省会」についてはすでに触れたが、この会は「禁酒進徳」の二事をその結成標語にして結成された。機関紙の『反省（会）雑誌』⁷⁵⁾の記事も文字通り「禁酒」や「節酒」など「進徳」に関するものも多く見られる。秦の『反省会雑誌』投稿記事や学生時代の宗教観の回想から察するに、このころの仏教運動に参加した若者の多くも、秦と同じように「宗教」問題に葛藤を覚えていたと思われる。つまり、信仰とまでは問題を深めていなかった若者が多かったのではないか。

「道徳」とは善行で、秦にとっても信仰を得るとは善人となる事、言い換えれば宗教によって人格が変わり、より良い人間となることであると受け取られていたようである。したがって、「身に法衣を纏ひ、口にアーメンを唱ふる人よりも偽善のない丈が、自分の方が優つて居るときへ考へるようになった」と言わしめるのであろう⁷⁶⁾。「宗教信者となれば偽善者になる」とも信じ込んでいた。信仰を得ても凡夫は凡夫のままであり、とても地獄は一定すみかであるといった親鸞の説いた思いはなかったようである。先の引用でも「宗教を求めるほど世の中が窮屈になつて、却つて心苦しい」とか「若し宗教信者となれば自分は屹度偽善家になるに違ひないと思つて来た」とあるが、宗教に入れば人格が変わり、立派な人物になり、まるで聖者のようになる、との思いがあったのではないか⁷⁷⁾。「平凡、日常至上主義」の中で、次第に秦も「道徳さへ欠けていなければ宗教は必要ない」、「自分には宗教の信仰はない併し道徳丈は堅固にやつて見たいと決心した」、「宗教の事は人間としてすべき道を尽すという事のみであるから、頗る事柄が簡単である」などと、「道徳があれば十分」と考えるようになっていった。

常観も『人生と信仰』第三章「倫理力行と信仰」で、倫理と宗教について次のように述べている⁷⁸⁾。人間の履行すべき法則が倫理であるが、複数の徳行を実行しようとすれば実際には衝突が起こる場合が生じ、また、理想が高くなればなるほどその履行が難しくなる。そしてこれが煩悶につながる。もしたやすく実行が出来るというものがあれば、その人の理想が低いのである。そして、宗教への動機は、当たり前道徳が行えないから、宗教に入ろうとする。ところが、宗教に入ると、また、諸々の悪事をやめ、多くの善をなせ、汚れた心を清め、行を正しくせよなど、様々な戒律を守ることを教える。結局、戒律を実行しようとしても道徳の場合と同じように、高く登れば登るほど、到底実行ができなくなる。それで次には仏陀に頼るも信仰も起こらず、称名、読経してもありがたい心も起こって来ない。いかにしても活路を見出せない結果になる。それで、力尽きて、初めて気づくのが絶対の仏陀慈愛の光である。万策尽きたところで慈悲を注いでくださるのが仏陀である。これが絶対他力の信仰である。そして、一度仏陀の慈悲に触れて、再び生活を振り返ると、一度捨てた道徳倫理も戒律も皆生き返る。この佛陀の慈悲を喜んで、佛の思し召しにしたがって、我々が出来るかぎり自ら戒め、自ら出来ることを努めるばかりである。世間の思惑を気にかけるでもなく、力み心で宗教をするの

ではない。それでいて、一度仏陀の慈悲に触れると、再び形式の戒律が生き返ると言う。近角が考える道德倫理と宗教との関係は、倫理力行より進んで宗教に入り、入りおわって再び道德に出てくる。この時の道德は真の道德である、と宗教を一旦通過した上での道德こそ本物の道德であるというものである。近角は親鸞聖人を引き合いに出し、聖人は戒律主義を打ち破って、ただ佛智の不思議に助けまいらすべしと信じる一つで、安く往生できることを示された。つまり、仏教の戒律主義を信仰主義に立ち返らせ、すべて信仰を通してこそ道德が生き、またそこに宗教の意義があると言うわけである。

龍溪章雄は先の論文で青年仏教運動について思想的質の問題を指摘している⁷⁹⁾。曰く「仏青運動の場合、若干の例外を除いて、全般的には特定の思想的指導者はその構成員自体のなかにはおらず、いわば思想的には未熟な青年たちの集まりであるから、思想運動と称することは困難である」。このように、当時の若者の宗教活動の問題点は「思想的内実」以外にも、秦の告白にもあるように、生活、人生を信仰にまで深めることができずに、社会的、政治的なレベルでの活動にとどまっていたことにあったといえよう。近角常観は欧米の宗教制度視察から帰国すると、次第に「宗教運動」から遠ざかり、「信仰運動」へと向かったが、これは、すべての「問題」は信仰を通してという信念からであった。

7 おわりに

真宗大谷派の僧侶である近角常観（1870-1941）は明治30年頃から東京本郷に建てた寄宿舎である求道学舎や講演・講話の場とした求道会館を拠点に精力的な伝道活動を展開した。秦は近角との付き合いについて、「近角氏は嘗て高等学校及大学時代には最も親しき学友の一人であった」が「自分と氏とは学校卒業後に於ける径路を別にしたから時々同窓会等で会ふ外は余り会ふ機会がなかつたのである」と記し、常観について次のように書いている。常観を知った人にはよく知られたことではあるが、引用しておくことにする⁸⁰⁾。

同氏は学校卒業後心身を宗教界に注いで殊に青年男女の間に南無阿弥陀佛の宣傳を以て目的として立っている人である。大学時代に於て同氏が信仰といふことの爲めに非常に煩悶し一時は精神に異常を呈して居るときへ友人間に思はれた人である。氏が信仰に入つてから此方同氏の憂鬱性は一変して非常に快活なる人となられたことは確に親しく接近したる自分の実見した所であり又多数の学友も皆知つて居る所である。

そして、秦も子供の死による「煩悶」から、近角の助けて回心を経験し、信仰による生活を送ることができた。秦は告白の手記を「終りに臨んで読者に紹介したき事は本郷森川町に於ける

近角常観氏の求道学舎である。毎日曜の朝は同舎で説教をして居られます。又毎土曜日の午後から九段の佛教倶楽部に於て説教があるそうであります」と常観による講話の聞法を勧める言葉で締めくくっている。

結局、秦敏之は大正 11 年 11 月に亡くなった。朝日新聞は「秦敏之氏逝く」との見出しで次のように報じた⁸¹⁾。

シンガーミシン最初の輸入者として斯界に多くの貢献をなした秦敏之氏は本年四月以降神経痛を病み渋谷の自宅に静養中であつたが四日午後二時遂に逝去した。享年五十三歳。氏は熱心な仏教徒で帝大仏教会館の建設などにも尽力した。葬儀は七日午後二時から青山斎場で仏式により執行すると

[補記]

1 秦敏之による「夏期講習会日記」と「夏期講習会開設の沿革」記

秦は、大日本仏教青年会設立に向けた取り組みや、大日本仏教青年会主催で実現した夏期講習計画の詳しい経緯について『反省会雑誌』に「夏期講習会日記」「夏期講習会開設の沿革」として報告記事を投稿して⁸²⁾、いかに「東西両都に於ける青年意見の暗号」が実現したかを明らかにしている。このうち、「日記」のほうは、当日のごく簡単な報告となっていて、「第一回仏教夏期講習会は明治 25 年 7 月 20 日を以て始まり 8 月 2 日を以て終る、…而して吾徒に於て利する所実に少々に非るなり、誰か又将来仏教徒の大団結は実に此東西の青年を連合せし一小会に基みするを知らんや」とあるだけである。

他方、「夏期講習会開設の沿革」では、かなり詳しく東西仏教青年の「共同的精神産出」の成果が報告されている⁸³⁾。「美なるかな今回の事、始め東都学生之をいひ、而して東都人は之を実行するの手段なかりき、京都の人士、始め之を言はず、而して一通の依頼書に依って容易く此事を成し遂げたり」とある。「東都学生之をいひ」とは、明治 25 年 1 月 6 日、東京駒込真乘（ママ）寺に置いて東都仏教青年の懇親会が開かれ、帝国大学、専門学校、慶應義塾、明治法律学校、哲学館、第一高等中学高などが会した時の会員からの提案発言をさす。

吾徒は今社会の裏面に住するものなるが故に公然たる事業に着手すべきにあらず…現今仏教不振の原因は、仏教者に共同的精神なきに依るに非らずや…凡門内の事業を撲滅するものは一として門内の人士に非ざるはなし、…此に余輩青年は夏期の休暇を利用し、…東西書生の連合を為し、…一は仏教を知る事愈深く、一は未知の良友に接するの便あらん、千万言大に夏期集合の必要を説く

計画の実行に向けては高等中学徳風会員が斡旋することとなった。ところが「東西学生連合の場所は便宜上必ず仏教の首府京都の近傍に於て」実施することと一致したものの、「斡旋の労を自ら取り玉ふの人なし」という事態が起こった。これを指して、「而して東都人は之を実行するの手段なかりき」と記している。仕方なく「京都諸学校の有志学生諸氏へ依頼書を呈すること」になり、場所、日時、講師などの斡旋依頼書を第三高等中学、大谷派大学寮、本派大学林、同文学寮尋常中学校へ向け発送した。「京都の人士、始め之を言はず、而して一通の依頼書に依って容易く此事を成し遂げたり」とあるように、京都の有志は直ちに談話会を開き、大谷派教学科長太田祐慶氏を会長、文学士藤井宣正氏を会計長に選出し、須磨を会場予定地として動き出す。櫻井義肇、櫻井英寿の2氏が須磨に視察に出向き、櫻井義肇の旧知の斡旋で会員の旅宿が確保された。そしてこれが、島地のいう「不思議にも東西両都に於ける青年意見の暗号」内情で、また、秦が「美なるかな共同的精神」と自画自賛した「東西仏教青年の共同的精神産出の成果」の一部始終であった。

秦の報告に、駒込真浄寺での集まりで、夏期講習会開催の提案の他に、別の会員からは4月8日に釈尊降誕会開催についての提案がなされたとある。この時、話し合いで釈尊の小伝を歌本にして、『宇宙之光』と題した小冊子にして、来会者に頒布することが決まっている。寺主の寺田福寿師に斡旋が依頼され、師は伝記の撰述を大内青巒に託した。『宇宙之光』は「呉竹」、「花摘む御手」、「御園」から「燈火」まで15段の構成で、大内の友人岩井一水が曲譜をつけた⁸⁴⁾。冊子は大内による伝記だけが掲載され、数千部が当日「慶應義塾は同塾行動に於て、哲学館は其文学会に於て、高等中学は駒込真乗寺（ママ）に於て、或は演説会を催し或は法話会を開き、次て来会者に施本を頒布」されたとあり、第一回の降誕祭は会員それぞれの所属学校で開催されたようである。「是講習会とは全く関係なきもその起源は本会に縁深きを以て略記したり」とあるが、それ以後大日本仏教徒青年会で恒例の行事として毎年降誕会が開催されている。先にも指摘したように、これら一連の行事開催には能海寛の存在も忘れてはならない。

2 秦敏之による奥村五百子伝

「散る時か浮ふ時なる蓮^{はちす}かな」という句は説法などでもよく引用され、多くの聴聞者にとっては馴染みの句であるが、しばしば「誰が詠んだのかはわからないけれど」という注釈がつく。実は、この句は1900（明治33）年1月、奥村五百子らが門司から戦乱の地清国上海に向けて出帆した時、大谷光演（句仏上人）が餞として彼女におくった3句の中の一句である⁸⁵⁾。奥村五百子の名は今や朝鮮での仏教布教に関わる研究や軍国主義下での女性の戦争加害責任などを論じるフェミニズムの研究者以外にはほとんど知られていないと思われるが、「愛国婦人会」の創始者といえど多少思い当たる節もあるかもしれない。愛国婦人会は、女性による軍事援助

団体として1901（明治34）年に結成され、皇后が総裁につき、華族や将校、政治家などの名望家婦人が会員として名を連ねた団体である。戦前には奥村五百子の伝記もいくつか出版され、映画や演劇にもなっている。ところが、実は奥村の生前中に秦敏之は「奥村五百子伝」を執筆し、アメリカ渡航前に連載記事を『政教時報』に投稿しているのである⁸⁶⁾。奥村五百子が光州での実業学校建設におわれていた時、一時体調を崩し日本に帰国した。その時秦敏之は病床の奥村五百子を見舞い、彼女の評伝を書こうと思い立った。そのいきさつを秦は「奥村五百子伝」の初回に次のように書いている。奥村五百子55才、秦敏之29才のことである⁸⁷⁾。

われ女史と交はりある已に数年、其意気の壮なるに感ずること深し。去月女史肺患を静養せんが為に帰朝し、今や東都の客寓にあり。われ一日女史を訪ふ。病頗る重きが如。然れども意気の壮なる談論の快活なるに到りては旧時に譲ることなし。忽ち足袋をぬぎ足のうらを叩いて曰く。秦さん、之は「国家まめ」です。妾か朝鮮へ行つてから一年半、草鞋を解かなかつた結果です。この通り金の如く堅くなりました…われ女史の動作の頗る頑瞑なるが如くにして、其精神の頗る文明的なるに感じ、殊に女史が国家の為に其身心を勞し、遂にこの重患に罹りたるを惜み、今や女史の幼児に遡りて聊かその経歴を叙し来らんとす。而して女史の動作の外交に渡るもの、如きは到底今日に於て記し得べからざるものあり。故に女史の伝を完成せんは女史百年の後に非ずんば能はざるなり。

秦による奥村五百子伝は短期間に執筆され、他の伝記と比べれば短く、それほど詳細なものではない。しかし、奥村五百子伝としては最初の伝記で、従来の研究でも全く言及されていない資料で、貴重である。また、秦も「女史の交はる所は海陸軍人に多く、貴族に多く、政治家に多く、また婦人よりも男子に多し」と述べているように、当時の日本の植民地政策と仏教界、特に真宗東本願寺の朝鮮における布教活動に関与していた人たちとの関係も密で、その意味でも興味深い資料となっている。

この秦敏之による奥村五百子伝については、拙稿「秦敏之による奥村五百子伝をめぐって」でくわしく検証しているので参照願いたい⁸⁸⁾。

注

- 1) 本稿執筆にあたっては「近角常観研究資料サイト」(<http://chikazumi.cc.osaka-kyoiku.ac.jp/index.html>)の書簡並びに蔵書を利用した。書簡の閲覧、使用許可をいただいた求道会館館長近角真一氏に感謝したい。また、資料は、大阪教育大学岩田文昭教授を代表とするJSPS科研費16K02181の助成によって作成されたものを利用させていただいた。
- 2) 『本山報告』第50号（真宗大谷派本願寺寺務所文書科、1889年8月）に「東京留学」として記載があ

る（8頁）。秦は東京に出て名前を敏之と改名している。この件については他に、暁烏敏、西村見暁共編『清沢満之全集』第3巻（法蔵館、624頁）や西村見暁『清沢満之先生』（法蔵館、1951年、136頁）などにも記載がある（秦千代丸の記載箇所については大阪教育大学岩田文昭教授の御教示による）。

- 3) 秦早穂子『巴里と女の物語』PHP 研究所、1981年。
- 4) 例えば、ルネ・クレマン『太陽がいっぱい』やゴダールの『女は女である』など。
- 5) 秦早穂子『巴里と女の物語』163-173頁。
- 6) Andrew Gordon, *Fabricating Consumers: The Sewing Machine in Modern Japan*, University of California Press, 2012, p. 25. 邦訳：大島かおり訳『ミシンと日本の近代』みすず書房、2013年。
- 7) 秦早穂子『巴里と女の物語』164-5頁。
- 8) 「そのままゆけば、50代目の僧侶となるはずだった」とあるが、彼が生まれた道教寺は14世紀ごろの開山で、「50代目の僧侶」については思い違い（あるいは誤植）であろう。なお、早穂子氏によれば敏之は寺を妹婿に譲って、還俗。寺は15年ほど前に焼失したとのことである。
- 9) 注2参照。近角は京都中学を卒業後大学寮専門別科を卒業し、留学生に選ばれた（『本山報告』33号、明治21年、8頁）。
- 10) 真宗本願寺派からの上京組には後で触れる古河勇（老川）や藺田宗恵、龍口了信、佐々木清磨などがいた。
- 11) 『東京帝国大学一覧 明治32-33年』東京帝国大学、1899年。国会図書館デジタルコレクションによる。「32年9月現在」の名簿である
- 12) 同上、383頁。
- 13) 『東京帝国大学一覧 明治33-34年』、東京帝国大学、1900年。国会図書館デジタルコレクションによる。ゴードンは秦が「かなり年高の29という年齢で卒業」(graduated . . . at the relatively mature age of 29) と書いているが、当時の日本の高等教育制度では、欧米とは異なり、帝大卒業はほぼこのくらいの歳になった。
- 14) この件については秦早穂子氏のご教示による。なお、高峰謙吉博士研究会事務局の三門氏によれば、上中啓三氏は当時24歳で、大阪薬学校卒業後、東京帝国大学医学部薬学科にて助手を務め、1899年に渡米し、高峰研究所の助手を務めていた。帰国して、高峰が社長を務める三共製薬に入社し、タカジヤスターゼなどの研究開発に携わった。
- 15) 『反省会雑誌』第2号、反省会、1888年、15-18頁。『反省会雑誌』への投稿はこの他に「青年仏教徒の連合及真理の討究は夏期にあり」（第6年第7号、1891年、9-11頁）、『反省雑誌』（反省雑誌社）には「夏期講習会日記」（第8年第5号、1893年、6頁）、「夏期講習会開設の沿革」（第8年第5号、1893年、7、8頁）、「銃狩は士君子の嗜むべき遊技にあらず」（第8年第5号、1893年、10-14頁）、「大国民と大頭脳」（第13年第10号、1898年、5-13頁）がある。
- 16) 例えば、中西直樹『新仏教とは何であったか』法蔵館、2018。
- 17) 嶋中雄作編『回顧五十年：附・中央公論総目録』中央公論社、1935年、3、4頁。国会図書館デジタルライブラリー
- 18) その中で、「この反省会で牛耳を執っていた学生の一人、古河勇（老川と号す）氏は…雑誌が生まれると管実丸、小原松千代と共に編集係に選ばれ、第一号の巻頭論文「朝鮮の文明を誘導するは日本仏教者の責任なり」はかれの筆に成ったものである。時に十七歳」と書いている（『回顧五十年：附・中央公論総目録』4頁）。
- 19) 飯塚勝重「新仏教徒能海寛と一統教」『アジア文化研究所研究年報』50号、アジア文化研究所、2016年、

- 16 頁。(東洋大学学術情報リポジトリ) 実は、この二人は後に東京で一時同宿し、仲間として新仏教徒運動を推し進めることになるが、京都時代から共に反省会雑誌の創刊などで協力しあっていたことがわかる。しかし、能海寛のこれまで反省会雑誌への関与についてはほとんど取り上げられていない。この点について飯塚は、反省会雑誌の編集や海外宣教会の運営についても「実は彼こそ中心人物であった」が、「反省会員として与えられた番号(反省会では83号、経緯会26号)で活躍しており、また、投稿記事についても殆どが匿名であったから、多くの研究者に注目されなかったのである」と指摘している。
- 20) ここでは隅田正三「『能海寛の『新仏教徒』運動の軌跡』年表」、能海寛研究会機関誌『石峰』第20号、2015年、91-100頁)を参考にした。この年表は、能海寛の「春秋日記」、「手帳記録」、「出納記録」、「紀行記録」に基づいて作成されている。
 - 21) 招聘の経緯などについては中西直樹『新仏教とは何であったか』(法蔵館、2018年)第3章参照。当時の神智学協会の動向などについては逐次『反省会雑誌』でも報告されていた。
 - 22) 11月に壮行された送別会には秦や近角、渡辺海旭、南条文雄らがかけつけている。
 - 23) 古河老川『東京仏教の将来』(嶋中雄作編『回顧五十年：附・中央公論総目録』中央公論社、7頁)からの引用。
 - 24) 藪田香融「初期の仏教青年会」、『顯真学苑論集』51 顯真学会、1960年、96-106頁。龍溪章雄「明治期の仏教青年会運動(上) — 大日本仏教青年会を中心として」(『真宗学』75・76合併号、1987年)でも仏教青年運動の詳しい説明があり、この部分の引用もある。
 - 25) 当時の結社活動については中西直樹『新仏教とは何であったか』に詳しい。「大日本仏教青年会」創立については、「大日本佛教青年会広告」(『政教時報』第2号、1899年1月、16頁)による。
 - 26) 藪田香融「初期の仏教青年会」『顯真学苑論集』51、97頁。
 - 27) 関西仏教青年会の第十回講演集にある「仏教夏期講習会略歴」からの引用とある。
 - 28) 秦敏之「夏期講習会日記」、『反省雑誌』第8年第5号、反省雑誌社、1893年、6頁。秦敏之「夏期講習会開設の沿革」、同上7、8頁。
 - 29) この秦敏之による「夏期講習会開設の沿革」は中西直樹「明治・大正期東京の青年仏教者—徳風会から東京大学仏教青年会へ—」でも引用されている(5、6頁)。
 - 30) 寺田の他にも大内青巒、島地黙雷、福沢諭吉などの後援もあったと言う。(龍溪章雄「明治期の仏教青年会運動(上) — 大日本仏教青年会を中心として」、321頁)。
 - 31) 秦敏之「青年仏教徒の連合及び真理の討究は夏期なり」『反省会雑誌』第6年第7号、1891年7月号、9頁。
 - 32) この経緯などについては本論末の「補記」として掲載。
 - 33) 秦敏之「青年仏教徒の連合及び真理の討究は夏期なり」9頁。「老威の有志家と称するものは、集まれば食べて飲んでの園遊会になる」など悪習なども列挙されている。
 - 34) 同上、11頁。
 - 35) 龍溪章雄「明治期の仏教青年会運動(上) — 大日本仏教青年会を中心として」、324頁。
 - 36) 入信の経過については、近角常観『懺悔録』文明堂、1930年(第15版、初版は1905年)、15-31頁に詳しい。
 - 37) この大日本仏教徒同盟会の機関紙名は『政教時報』。1899年1月創刊で、ほぼ毎月2回発行され、1903年12月の第107号が最終号となった。
 - 38) 『政教時報』36号、1900年8月、18頁。

- 39) 『政教時報』37号、1900年12月、16頁。「本誌前号に於て本会総務員たる文学士秦敏之氏の渡米に就て本月一日出発の事を記せしが、同氏は都合によりて出発を見合せたるを以て、去日三日午後五時より上野公園精養軒に於て送別会を開きしに、在京の友人二十余名出席せられ同氏の行を壮にせられたり。先づ発起人総代として真岡氏の送別辞、秦氏の答弁、終りに高楠氏の丁重なる送辞あり、一同歡を尽くして散会せられたるは午後八時過ぎなりき。因に言う同氏は去る11日正午愈々チャイナ号に搭し横浜港出帆せられたり。此日新橋迄見送るもの数十名」
- 40) 『政教時報』43号、1900年11月、20頁。
- 41) 「米國通信の一節」、『政教時報』45号、1900年12月、19頁。
- 42) 結局、この年の大統領選挙ではマッキンリーが勝利した。渡米中の近角はマッキンリー大統領を訪ね、会談を行っている。近角からの「米國通信」（『政教時報』第33号、1900年）に、常観は「8日朝ニューヨークに着9日10日11日同市に滞在...11日夜小川氏と同道ワシントンに來り、...大統領マッキンレー氏に面会し、種々談論致候」とある（19頁）。
- 43) 『政教時報』49号、1901年2月、12-16頁。記事の筆者名は「在紐育 麻郷学人」となっているが、本誌の目次には秦敏之と記名されているので、秦による報告記に間違いはない。
- 44) 特に、宗教については、「アメリカにおける宗教の勢力は振るわず、教会も空席が見受けられ、参詣者は老人と妙齡の夫人で、年少の男子は特に少ない」。例えば、ニューヨークでは「青年にして会堂に入るもの僅かに百分の五なり」と書いている。しかし「キリスト教の基礎は凝固で」とあると、公立小学校を参観した際目にした教育の場における宗教の実態についても報告がある（同上、12頁）。
- 45) 秦敏之「雑録」（『政教時報』66号、1901年11月）16頁。
- 46) 1902年8月9日付、秦から近角への書簡。求道会館資料番号3379。
- 47) ニューヨークでの秦については松下長重編『東洋成功軌範：校定』（中央教育社、1911年）中の「シンガー裁縫機械会社日本中央店 秦敏之君」（269-272頁）に詳しい。
- 48) 秦早穂子『巴里と女の物語』、164、165頁。
- 49) 「トービン」の名前は松下長重「シンガー裁縫機械会社日本中央店 秦敏之君」に出てくるが、どのような人物であるのかは不明である。
- 50) 渡辺慎治「秦敏之君」渡辺慎治編集兼発行者『現代実業家月旦 天才乎人才乎』、1908年、279-281頁。
- 51) 本稿中の秦からの書簡については、立命館大学大学院文学研究科日本文学専修博士後期課程在学中の池田彩音さんに翻刻をお願いした。書簡の公表にあたっては孫になる秦早穂子氏から許可をいただいた。
- 52) 秦敏之「米國通信の一節」19頁。
- 53) 本山からの突然の帰国命令は、その年に実施予定の衆議院選挙に出馬させるためであった。朝日新聞には、常観は「長崎に着航（ママ）するや自家の代議士立候補の事を聞き、これ自家の本意に反すとし、京都に帰還して直ちに之を辞退したり」とある（「仏教新宣伝者 近角常観君」、1916年6月18日付『朝日新聞』朝刊3頁（「新人物」シリーズ（41）））。
- 54) 「伯林ヨリノ御撮影慥カニ到着久シブリニ君ニ面シタル思ヒ有之懐カシク存候」とある。他にも当時の写真についての感想を書き送っている書簡が2、3通残されている。例えば、久保猪之吉からの手紙には「つら／＼拝見するに大分太り玉ひたるやううれしかりき。髪の工合鬚の模様にてかはは精神上変化ありし為か、従来の悲觀的沈鬱的の容貌にかへて樂天的快活的の相を呈せり」（1902年1月付書簡、求道会館資料書簡番号3238。久保猪之吉は常観の親友で、学生時代から短歌結社いかづち会を結成し、卒業後は京都帝国大学福岡医科大学（のちの九州帝国大学）の耳鼻咽喉科教授として活躍し

- た。拙稿「盟友、近角常観と久保猪之吉—求道会館に残された書簡をめぐって」(『立命館国際研究』32巻3号掲載予定)などを参照。)また、常観の実母側のいところになる丸山環も「スタイルも東京御逗留中とは変り立派なる洋人かとも見江申候」と感想を書き送っている。(1902年1月、求道会館資料書簡番号3238)
- 55) 秦敏之「二郎は死して活躍せり」『求道』第10巻2号、81頁。
- 56) 同上、75頁。
- 57) 同上、81頁。ただし、早穂子のエッセーでは3男3女となっている。早穂子からの私信によれば、三女は生まれてすぐに亡くなったとのことである。
- 58) 1904年7月4日付『朝日新聞』朝刊5頁。(朝日新聞 聞蔵II ビジュアル)。一般にこの裁縫女学院は1906(明治39)年有楽町で開院したとされるが、開院は敏之がアメリカから帰った翌1904(明治37)年の神田区表神保町でのことで、のちに有楽町へ移転している。この記事や閉院予告で確かめられる。
- 59) 求道会館の資料には「シンガーミシン女学院主催(進呈)『第二回秋季展覧会案内券』(御家族御同伴被下度候)」と印刷されたパンフレットが残されている。展覧会の案内で、「生徒製作品ミシン実演」などが予定され、当時の学院運営の一端が見えて興味深い。この案内券と引き換えに抽選で寄贈作品が贈られているが、記載されている作品リストから、当時ミシンによって縫われていた日用品が垣間見られる。また1907年9月11日付の朝日新聞に「シンガーミシン裁縫女学院の昨今」という見出しで「近来同女学院に対し悪声を放つ者があるから記者は昨日有楽町の同院を訪問した」と興味ある訪問体験記事が掲載されている。
- 60) 求道会館資料書簡番号10659。弊院は機械裁縫の模範学校たらん希望を以て明治37年7月設立せられ明治41年上半期に到るまで卒業生の多きに比例して入学者益多く一時は毎日の出席平均数500名に近づき候処41年後半期より漸次減少して昨年の如きは百数十名となりしことさへ有之今年に入りてや、回復の徴有之候へとも尚200余名に過ぎ不申翻りて時勢の進運を觀察致候に全国の高等女学校裁縫女学校等に於ける機械裁縫教育の設備大に整頓して年々進歩の傾向著しく、シンガー会社は全国各都市に教育機関を設けて我卒業生を採用致し今後女教師数百名を養成して全国に散在せしめんと計画さへ有之候故機械裁縫普及の目的は達せられて社会は却て弊院存立の必要を認めざるを立証致居候仍て弊院は今月已後総て入学希望者を謝絶し、現在生の卒業若くは修業期を予想し本年12月末を以て閉院の事に決定致候間此段予告仕候也
- 尚弊院閉鎖後は現今の校舎はシンガー会社女教師養成の場所に充て機械裁縫の普及に関しては間接に不相変努力可仕候間此段御安心可被下候先は平素の御厚意に対し右事情開陳仕候也
- 61) 秦からのハガキ。求道会館資料書簡番号8530、8586。
- 62) 秦敏之「二郎は死して活躍せり」『求道』第10巻2号、1913年2月、71-82頁。
- 63) 年の暮れから風邪気味だったが、麻疹との診断で敏之もそれほど心配をしていなかったが、30日の夕方から喘息を併発し、結局年明けに急に息をひきとった。「死因は唯喘息の痰の為に窒息した」とある(同上、71頁)。
- 64) 当時の生活を次のように語っている「自分はシンガーミシン会社の営業を助けて毎日横浜へ通ひ、朝は8時前に家を出て夜は早くとも午後7時に帰宅するという身分であるから、家事の事、児童の教育は殆んど総て妻の手に任せてある。併し妻とても家庭の外にシンガー裁縫刺繍院の後見を為し、且又自分の投資して居る日本実業商会の監督をして居るから随分年末は忙しいのである...又妻の母も同居して居る...、下女も3人程助けて居る、...自分はシンガーミシン会社の為に此10年間働いた..

- . 遅い時は11時12時頃帰宅することもある、これが年中の業務である、其外に必要な事が起つた時は日本全国の分店を巡回したり、観察したりすることがあつて留守勝ちである。」（秦敏之「二郎は死して活躍せり」73頁。）
- 65) 同上、80頁。
- 66) 同上、74頁。
- 67) この点については『求道』の告白（「二郎は死して活躍せり」）でも自ら説明しているが、アメリカ滞在中に近角に送った手紙にも当時彼が宗教に対してどのように思っていたのかが綴られている。
- 小生ノ宗教心ハ矢張不相変冷淡デアル、小生ガ事業上逆境ニ陥リテヨリ益宗教心ハ冷淡トナリ来リ、益々何宗ニヨラズ宗教ヲ信ズルト称スルモノ、心中如何ヲ疑フノ念益々強マリ来リタレバナリ併シ乍ラ自分ハ悪ヲ為サントスル念ハ起ラズ矢張善ヲ為スモノ、悪ヲ為スモノヨリ強キヲ信シ居レリ、小生ハ宗教ヲ信スルモノニ対シテハ宗教ハ大功カアルコトヲ信ズレドモ、宗教ヲ信ゼザルモノニハ何ノ用モナキモノナリト思フ様ニナレリ、宗教ハ信者ニモ未信者ニモ同一ニ有用ナリヤ如何トスラ疑問起リ来レリ。（1902年8月11日付書簡、求道会館資料番号3379）
- 68) 阿満利磨『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書、1996。
- 69) 宗教が日常生活の中に「俗化」していく過程について、阿満は「日常主義の優位は、神道だとか仏教だとか、あるいは儒教という個別の現象ではなく、17世紀以来の日本社会に共通した現象であったと言える」と分析している。（163頁）
- 70) 例えば、正月やお盆、彼岸などの墓参りや先祖供養、また神祀りなど、もともとは宗教行事であったが「年中行事」や風俗、習慣に組み込まれるうちに、いつの間にかその年中行事に参加するが、特に自分が仏教や神道の「信者」であることを意識することはほとんどない。
- 71) 秦敏之「二郎は死して活躍せり」79頁。
- 72) 同上、77頁。
- 73) 同上、76、77頁。
- 74) この和讃は親鸞聖人撰述の「正像末和讃」の第52首。『真宗聖典』では「船、海、乗」はそれぞれ平仮名表記になっている。
- 75) 『反省会雑誌』と『反省雑誌』を『反省（会）雑誌』と表記する。
- 76) 秦敏之「二郎は死して活躍せり」74頁。
- 77) 信心を得ても金剛の身体を得るわけでもなく、喜怒哀楽から解放されるわけでもなく、不動の精神状態を得るわけでもない。あくまで凡部は凡部のままで信心をいただくわけで、その信心とは阿弥陀仏の本願によって「疑いが除かれたことをいう」だけで、聖者になるわけではない。
- 78) 近角常観『人生と信仰』森江書店、1908年、60-87頁。
- 79) 龍溪章雄「明治期の仏教青年会運動（上）—大日本仏教青年会を中心として」では、青年仏教運動が従来宗教史・仏教史の領域で概説的か断片的にしか紹介されていない理由としてあげられている。
- 80) 秦敏之「二郎は死して活躍せり」74頁。
- 81) 1922年11月6日付『朝日新聞』朝刊 3ページ。（朝日新聞社 聞蔵IIビジュアル）
- 82) 『反省雑誌』第8年第5号、1893年、6-8頁。
- 83) この記事は最後に「つづき」とあるが、特にその後の『反省会雑誌』にはそれらしきものは見当たらない。
- 84) 『宇宙之光』を執筆に至った経過などについては、あとがきで大内が簡単に記している。
- 85) 山折哲雄『勿体なや祖師は紙衣の九十年—大谷句仏』（中央公論新社、2017年）では句仏の句として

掲載されているが、特に句についての説明はない(118頁)。他の2句は、「梅檀の枯れても残る馨かな」と「ちりてこそ我日の本の桜かな」(渡邊霞亭『奥村五百子』霞亭会、1915年、336頁)。

- 86) 秦敏之「奥村五百子伝」の『政教時報』掲載号をリストしておく。すべて1899(明治32)年の発行である。「奥村五百子伝(1)」第15号(8月1日)、「奥村五百子伝(2)」第17号(9月1日)、「奥村五百子伝(3)」第18号(9月15日)、「奥村五百子伝(4)」第19号(10月1日)、「奥村五百子伝(5)」第20号(10月15日)、「奥村五百子伝(6)」第21号(11月1日)、「奥村五百子伝(7)」第22号(11月15日)。
- 87) 『政教時報』15号、1899年8月、19頁。
- 88) 「秦敏之による奥村五百子伝をめぐって」、『立命館言語文化研究』31巻3号、2019年。

(三宅 正隆, 立命館大学国際関係学部教授)

Toshiyuki Hata's Life as a Religious Activist and Businessman

Toshiyuki Hata is one of the lesser celebrated men in the Japanese religious history. To those who know of him as a Buddhist youth activist during Japan's Meiji Era, it may come as a surprise to learn that he was also a manager in the Singer Sewing Company who made a significant contribution to that company's Japanese operation. Likewise, people familiar with Hata's position in the business community may be surprised to learn that he was also a devoted young Buddhism activist.

One objective of this paper is to merge those two aspects of Toshiyuki Hata in order to illustrate the full range of his life's activities, with special attention to how his attitude toward religion evolved. Recently, there has been a full-fledged discussion of the trans-sectarian, or pan-Buddhist, movement among Japanese youth in the late 1880s and the 1890s, and Hata is sometimes referred to in those arguments. The hitherto brief references to his role in Buddhist reform notwithstanding, I will show that his contribution to the religion was too important to be discounted and is deserving of more attention.

When Hata attained a managerial post in Singer Japan, he set aside his passion toward reformation of traditional Buddhism and tried to live a life void of religion. One goal of this paper is to uncover what led him to try to transform into something of a skeptic of religion. This paper will also examine Hata's experience of religious "awakening" (回心) which he underwent after the loss of one of his children, when he began listening to the teachings of his religious soulmate, Jōkan Chikazumi.

(MIYAKE, Masataka, Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)